

吉良竜夫先生を偲んで —学際研究者であった吉良先生—

滋賀県立大学環境科学部・元琵琶湖研究所 浜 端 悦 治

私が初めて吉良竜夫先生にお会いしたのは、私がまだ東京農工大学の学部生であった1970年代の半ばころ、岩波ホールでの講演を聞きに行った時であった。講演後にはほんのわずかながら話をさせて頂いた。今は何をお聞きしたのか内容は忘れてしまったが、予想以上に若い先生であることに驚いた記憶だけが残っている。というのも、先生の名前を知ったのは、植生学をかじり始めていたころで、教科書の中にあった先生の「暖かさの指数」からであり、その引用文献として『日本の森林帯』（吉良, 1949）が上げられており、30年近く前に仕事をされた方が、まだ現役で活躍されているとは思っても見なかったからである。その後、生態学会の大会などに参加するようになり、大阪市立大学植物生態学研究室の仕事の内容や、バリバリの大阪弁で学会発表をされる先輩諸氏などを知り、大学院では先生の部屋の門をたたいた次第である。

教授時代の先生は、その後もそうだが、何をやるなどとは決して言われなかった。森林生態をやっていた私が、琵琶湖研究所に来てからいつの間にか水草に転向していたのも、先生の指示ではなかった。しかし先生は「瀬田川でこんな水草を拾ったんだけど、何だろうね」とか「中国のエルハイにいてこんな水草があったよ」とか、機会があるごとに標本などをお見せになり、真綿で首を絞められるように、いつの間にか引きずりこまれていったというのが実態であるようだ。

学際研究者であった先生は分野の異なる多くの

文献を読まれており、なによりも多くのことに関心を持たれていた。私は中学時代に遺跡の発掘のまねごとをしていたが、先生と話をしていたこれまでの謎がとけたことがあった。それはなぜ遺跡が土の下に埋もれているのかということであった。そのことをフッと漏らした時、先生はそれは中国からのダストのせいだと即座に答えられるとともに、年間の堆積速度と参考文献まで教えてくださった。民俗や歴史にも詳しく、中国雲南省のエルハイ湖の調査の際には、この湖での鵜飼いでは鵜は紐で繋がれていないとか、山の斜面の等高線に平行についている跡は、山羊などがグレージングの

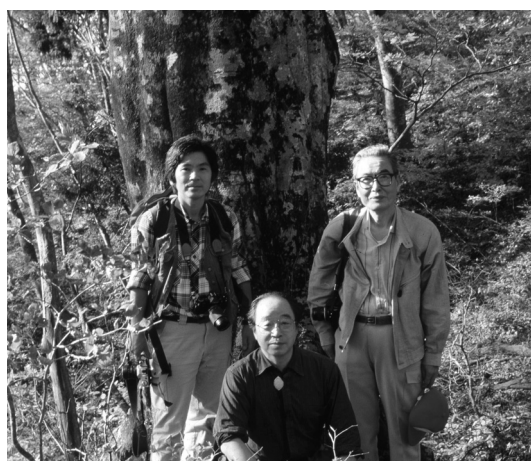


図1. 吉良竜夫先生（右）、依田恭二先生（中央）と案内して下さった青木繁さん（左）。（1993年11月4日、滋賀県高島市の天増川上流のブナ林にて）。

際につけた通里道の跡だとか、多くのことを野外で教わった。

関心を持つという意味では、そのエルハイへの道中、省都の昆明（クンミン）から西に400kmを車で走ったが、その間先生は助手席に座られて、一睡もせず真剣に景色を眺め、突然ストップをかけられ写真を撮られることがしばしばあった。その後2004年にモンゴル草原を走った時も同様であった。風景が語りかける情報を一時も見逃さないという気迫が感じられた。

また植生から生態学に入っていった私は、吉良研究室に来た当初、プロダクションをやっていた方だから、植物の種名などはあまりご存じではないだろうとたかをくくっていた。しかしそのころから文部省の環境科学特別研究「琵琶湖とその集水域の環境動態」が始まり、琵琶湖の周りを研究室総出で回ったことがあった。その際に次々と植物の名前を聞かれてかなり弱ったことともに、先生が植物名を学名で言われるのに驚いたのを感じている。そうした植物分類に対する知識は、大興安嶺での調査で培われたと、後にお聞きした。その調査では標本の収集・整理が先生の役目で、みんなが寝てからも延々と標本作りをされたとのことであった。このことを聞いてから、これまで野外調査に出かけ、夜遅くの標本作りに気の滅入る思いをしていた私だったが、吉良先生もされていたのだからと言いつけると苦でなくなるようになった。

私が在籍した頃の吉良研究室では、当時の受験対策用語をもじって「K夫人の傾向と対策」がよく言われていた。吉良先生の泰子夫人は、ゼミ日の夕方にはよく顔を出された。ゼミが終わった後には、先生からではなく夫人からよく叱られた。後で分かったことだが、お二人には子どもがいっぱいいなかったためか、どうも先生はかなりのことを夫人に話されていたようで、先生は直接言わ

れないが、夫人からその小言が発せられていたようだ。そのため、学生にとっては先生より夫人の方が怖い存在であった。吉良先生は京都帝国大学の学生時代最後の年に今西錦司グループの一員として大興安嶺を探検されたが、その直後に腎結核になられ10年以上もフィールド・ワークをあきらめておられた。そのため泰子夫人は常に先生の健康を気遣い、学会や旅行には同行されることが多かった。

2006年の年末ごろから、琵琶湖研究所開設当初の所員らで、吉良先生の誕生日の12月27日前後に毎年同窓会を開いてきた。ただ2008年は、先生の89歳の誕生日の前日の12月26日に泰子夫人が他界され、中止となった。夫人が長い闘病生活をされている間、吉良先生は食事の支度など家事一切をご自分でされていたが、翌年の年末に買い物のために出かけられた大津の西武で、意識をなくされ救急車で病院に運ばれそのまま入院された。その後退院されたが、半年後の2010年6月に自宅で倒れているのを、ヘルパーの女性に発見され、再度入院された。その際に脳梗塞を起こされ、会話ができない状態となられた。しかし現在も出版が進行中の著作集の第1巻が、先生の91歳の誕生日に刷り上がり、翌28日に編集者の澤近十九一（さわちか・とくいち）さんや只木良也先生とお届けしたときには、大いに喜んだ表情をされた。しかし、その後お見舞いに行くごとに、表情が次第に乏しくなるのを感じた。2011年7月8日に第2巻をお渡しに行った時は、かろうじて笑顔を見せられたに過ぎなかった。それから11日後の7月19日午前9時55分、吉良先生は91年の生涯を閉じられた。泰子夫人が亡くなられて2年半後のことである。

吉良先生の座右の銘は「花いろいろ、人それぞれ」であったかと思う。その言葉を繰り返しながら私などに対応してくださっていたのかと思う。

先生，奥様，長い間ご苦労さまでした。そしてありがとうございました。ゆっくりとおやすみください。

引用文献

吉良竜夫. 1949. 日本の森林帯 林業解説シリーズ17 (初版). 36pp. (社)日本林業技術協会, 東京.

